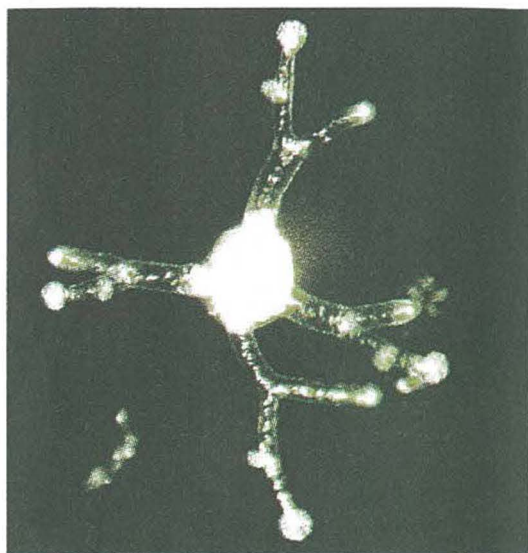


ハイクラゲ



△
クラゲらしからぬ生態を持つハイクラゲ

久保田 信

23



赤ちゃんのようにハイハイするという意味で名付けられたハイクラゲ。一生を海底で過ごし、浮遊生活をしていないクラゲらしからぬクラゲである。

田辺湾の潮間帯で、イガイ類が群生している所に生息するのですぐに見つけられるが、その大きさは1ミリほどでとても小さい。海藻を洗った海水をこしても採集できる。京都大学瀬戸臨海実験所内を流れる海水パイプの中にもいる。プラスチック容器を海水に漬けていると、その底に付着しているのが見つかる。日本には数種いるが、写真の個体はまだ小さくて、種は同定できない。

普段ははうように動いているが、触手に吸盤があつて、何かに引っついてじっとしていることも多い。

触手は成熟すると数十本になり、それ

ぞれの触手は分岐している。短い枝に吸盤ができ、長い枝には丸い玉のようなものがかくつか付いている。玉には刺胞が詰まっていて餌を捕らえるのに使う。触手の基部の内側にはそれぞれ1個の眼点を備えており、光を感じる。

ハイクラゲはクラゲとしては珍しいやり方で増える。普通のクラゲは分裂しないがハイクラゲは縦分裂してクローンをつくる。体を縦に二つに割いて2個体になるのだ。写真の個体はそのような方法で増えた直後と思われ、触手のまだ少ない小さな個体である。

中央部の円盤状の所が胃袋で、ここには生殖巣ができる。腹側の真ん中には短い口柄が広がっており、ここから獲物をのみ込む。

ポリプは、昭和天皇が群生性でクラゲ芽を付けたものを記録されたが、なかなか野外で見つかるものではない。

(京都大学准教授)